

巻頭言：神奈川県図書館協会会長の就任にあたって	1
特集：「川崎市立図書館新システムが稼働しました！」	2
研修会レポート：講演会「絵本に願いをこめて」	3
連載：わたしのイチオシ 関東学院大学図書館「関内デジタル図書室」	5

神奈川県図書館協会会長の就任にあたって

神奈川県図書館協会会長 （神奈川県立図書館長）

江藤 政克

本年4月より神奈川県図書館協会会長に就任しました神奈川県立図書館長の江藤でございます。微力ながら皆様の御支援のもと、神奈川県図書館協会の発展に向け努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、私が勤務します県立図書館の現状について少し触れさせていただきます。昭和29年11月に県立図書館が県立音楽堂を併設する形で開館し、来年、令和6年は70周年となる節目の年になります。令和4年9月には再整備により新しい本館が「価値を創造する図書館」として開館しましたが、前川國男館（旧本館）及び収蔵館（旧新館）についても、令和8年度の完了を目指し、「魅せる図書館」及び「収蔵庫」として再整備を進めており、県立図書館の歩みにおいては、大きな変革の時期と言えます。こうした時期に、館長として就任するという巡り合わせに感謝しています。

こうした中、新しい本館では、企画展示「関東大震災100年 神奈川県被害と復興」を6月から約6箇月の会期で開催しています。この展示を通して100年という時間の経過を感じる一方で、大震災から5年後の1928年に設立した当協会の歴史や社会的な役割、功績などについても再認識しました。

「神奈川県図書館協会の歩み」には、当協会設立の経緯や時代背景等が記載されており、約1世紀に及ぶ長い年月の中で社会情勢や法令改正等を背景に、当協会や図書館の役割等が変化してきたことが伺えます。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが今年5月から「5類感染症」に移行しましたが、当協会としても、コロナと共存する日常における図書館の在り方について引き続き考えていく必要があるでしょう。

また、先日、昨年の台風被害を受けて一部区間の運休が長く続く静岡県内を走る大井川鐵道の運休区間にある1つの駅を訪れる機会がありました。小さな無人駅の一角には自由に利用できる図書が並ぶコーナーがあり、運休期間とは思えないような比較的新しい図書も並んでいました。近年、情報通信技術の発達、普及等により図書館の利用形態等も変化していますが、図書や読書が人々のつながりや交流を支えているということを、改めて実感しました。

地域における図書館の役割は今後益々重要になってまいります。県内図書館の活動の一層の振興に向け、皆様の御理解、御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

特集：「川崎市立図書館新システムが稼働しました！」

川崎市では、最新の ICT 環境に合わせたサービスを提供するため、令和 5 年 9 月に図書館システム更新を行い、10 月 1 日午前 9 時 30 分から新システムが稼働しました。

今回導入した新たな図書館システムの機能の概要についてご紹介します。

1. 蔵書検索機能の向上

旧システムでは「かんたん検索」において、タイトルか、著者名での検索に限られていたため、検索機能が限定的でした。新システムでは、自由語による検索や複数項目の設定による検索が可能になるなど、検索機能が向上しました。

2. ホームページ機能の向上

各図書館の開館状況と在館者数の状況の確認ができるようになりました。また、アクセシビリティへの配慮として、ホームページの音声読み上げのほか、文字サイズ変更や、色の反転、ルビ表示なども可能になりました。



3. 自動車文庫のオンライン化

今までは、自動車文庫で貸出・返却をした際、図書館に帰館後、システム上の処理をしており、データの反映に時間を要していました。

新システムでは、貸出ポイントで、貸出・返却のデータを即時に反映できるようになりました。また、その場で蔵書検索・予約、利用者の新規・変更登録ができるようになりました。

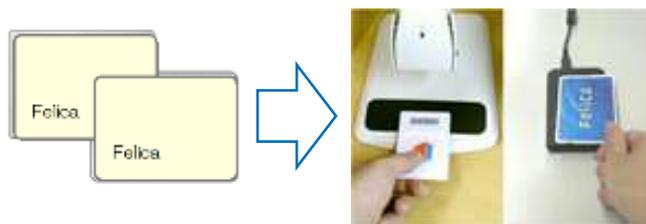
4. 読書記録機能の提供

図書館サービスとして読書シール発行機を導入し、読書記録手帳を作成できるようになりました。



5. IC カードの活用

交通系 IC カード（非接触 IC カード技術方式 Felica 対応）を利用登録することで、自動貸出機、予約照会機などで貸出カードとして利用可能になりました。



6. モバイル端末の活用

スマホアプリを導入し、貸出カードの表示や蔵書検索が可能になりました。アプリでは予約確保連絡や返却期限などのプッシュ通知を行います。また、読書記録機能により、借りた本を記録することができるようになりました。



より一層便利になった新システムについて、ホームページでもご案内しておりますので、是非ご覧になってみてください！

(川崎市立多摩図書館 福田万穂)

研修会レポート 講演会「絵本に願いをこめて」

会場 湯河原町立図書館

講師 作田 真知子氏（元・福音館書店こどものとも編集長）

（令和5年3月15日実施）

1 研修要旨

長年、福音館書店で月刊絵本『こどものとも』を担当され、編集者として絵本作りに関わってこられた作田真知子氏に、当時のエピソードを交えながら、編集者として感じたことや、絵本作りについてお話いただいた。

講演会終了後に、職員の案内で湯河原町立図書館を見学した。

2 講演概要

○湯河原町での活動

作田氏は、現在湯河原町でギャラリー・カフェ「飛ぶ魚」を運営するとともに、湯河原町立図書館の協議会委員や、町内での読み聞かせなど、子どもや大人に絵本を手渡す地域に根差した活動を行っている。「飛ぶ魚」では、絵本の原画の展覧会や絵本作家によるワークショップ、子どもたちに向けた「絵本の会」など、絵と絵本と、人との幸せな出会いの場を目指した活動を行っている。

○福音館書店への入社

月刊誌『子どもの館』編集部等を経て、『こどものとも』編集部で25年間、編集者及び編集長として絵本の編集に携わった。初めて編集に携わった『子どもの館』は、1973年に創刊され約10年間刊行された月刊誌で、子どもの文化や、心理学、文化人類学などの分野からたくさんの評論が掲載され、『昔話の深層』（河合隼雄著）など、連載から生まれた本もある。作家では角野栄子さんや富安陽子さんなどが登場するなど、子どもの本にとって果たした役割が大きい雑誌であった。

○絵本編集のプロセス

書いて欲しいという方が見つかったら、どんな本ができるかイメージし、手紙を書いたりお会いしたりして依頼し、原稿を見て可能性を探っていく。文章と絵の作家が異なる場合、文章ができあがると絵本画家を探す。文章を元に無数のラフスケッチを描き、編集者も伴走しながら

最適な表現を探り、このスケッチということが決まってから、本書きに入る。画材選びや、印刷所との校正、製本などを経て、1冊の本ができあがるまでに、最低3年はかかる。

編集者の役割として、作者が何を表現したいのか、そして子どもの本としてそれがベストになるのかを、伴走して一緒に考える。楽しいこともある一方で、信頼関係をうまく築けなかったり、見込み違いをしたりと苦労も多く、精神的にタフでないといけない仕事だった。

○絵本作りのエピソード

●『ぐりとぐら』

（中川李枝子作／大村（山脇）百合子絵）

作者のお二人は、たくさんの物語の主人公が住んでいるような方であった。子どもたちの生活はトラブルの連続であり、それに立ち向かい解決していくのが優れた文学という考えを持っていた。『ぐりとぐら』でも、大きな卵をどうやって運ぶか、割るかといったことが描かれ、それを楽しいことに変えていく様子に子どもたちは魅了される。

山脇さんは、絵を描く時の心構えとして、文章はよく読むこと、実物を見て丁寧に描くこと、良い気持ちで机に向かうことを挙げていた。山脇さんの絵は、物語の中に必要なことを愛情込めて丁寧に描いており、頭で作ったものではない安心感がある。例えば、国立科学博物館にあった野ねずみの標本を見て、それに服を着せて絵本のぐりとぐらが生まれた。また、空や地面は描かず、必要なものだけで内容を伝えている。

●『ちょっとだけ』

（瀧村有子作／鈴木永子絵）

『こどものとも』50周年で文章と絵を募集した際の投稿から生まれた作品。赤ちゃんが生まれてお母さんが忙しくなり、お姉さんになった主人公のなっちゃんは、色々なことを自分ひとりでやってみるが、眠くなった時にちょっとだけだっこをお願いする。

絵を描いた鈴木さんには、幼稚園や公園などで子どもの様子をデッサンしてもらい、そこで出会った一人の女の子をモデルに主人公を描いた。制作の過程では、編集者とのやりとりで表現が変化していった。例えば、パジャマのボタンを一人で留めようとする絵では、ちょっとだけしかできなくてがっかりした表現から、ちょっとだけ成功して嬉しそうな表現に変化している。

最後のだっこの場面では、たくさんの候補の中から座っている絵を選び、背景は無くして主人公と母親の気持ちに焦点を当てている。一つの絵本を作るのに、一つの文章に対して画家がもの凄い努力をしていることが窺える一例。

○終わりに

近年、子どもの非認知能力が注目されているが、絵本の文化も、非認知能力を培うものの一つであると思う。絵本を読んで得られる自己肯定感や、言葉を聞くことで培われる、コミュニケーション能力の基礎としての言葉への信頼、主人公と一緒に想像力を働かせ、自分のものにしていくことなど、絵本を読むことを通して、そうした生きる力を養ってほしい。

絵本を手渡してくれる図書館には、胸がいっぱいになる喜びを感じられる絵本を取り上げてほしい。絵本を読むことで、子どもは自分の中にある自分を羽ばたかせ、より自由な気持ちになる。楽しい本と人との出会いを、これからもどうか作っていただきたい。

3 質疑応答

Q. 読み聞かせをする上で、年齢層に合った絵本を選ぶのに難しさを感じている。未就学児の子どもに、どういうものを読み聞かせたらよいか、普段心がけていることがあれば教えていただきたい。

A. 例えば、今日紹介した『カニ ツンツン』は、中学生ぐらいまで広く喜ばれる。また、『どっこ どうぶつえん』のように参加型の導入があるものも親しみやすい。昔話は、余計なことが書かれていないので、長くないものであれば3歳ぐらいから選べる。物語の絵本は、書かれている心理が分かるような年齢があると思うので、できるだけ年齢に合ったものを選ぶと良い。

Q. 編集者の方は、たくさんの素晴らしい作品

を、毎回どのように発掘しているのか。

A. 投稿や紹介を含め、色々な出版物に目を通している。物語や小説、大人向けや子ども向けなど、ジャンルを超えて目を通すということを日々やっている。また、良い絵本を見るだけではなく、時間があればギャラリーでの展覧会に足を運び、たくさんの絵を見て、書き手を知るようにしている。

4 館内見学

職員の案内により、湯河原町立図書館の館内見学を行った。

5 感想

図書館では多くの本を取り扱っていますが、その本が生まれる出版社での本づくりの現場については、深く知る機会がなかなかないと思います。ご講演の内容は、編集者として長年子どもの本に携わった知見や絵本作りのエピソード、作家のお人柄など多岐にわたり、本と人をつなぐ図書館員の仕事にとって、大変有意義なものとなりました。1冊の絵本が作られるプロセスについて具体的にご説明いただき、絵本に描かれた一つ一つの絵が、作家や画家、編集者との相互のやりとりによって、いかに子どもの気持ちに沿う表現に磨かれていくのか、その一端を知ることができました。

図書館は様々な年代の方に広く手渡す役割を担います。講演の最後に作田氏が述べられていたように、1冊の本を読んでより自由な気持ちになれるような、楽しい本と人との出会いを作っていきたいと改めて感じました。



(相模原市立図書館 渡邊 康司)

2023年4月、横浜・関内キャンパス開校とともに関内デジタル図書室が開室しました。

デジタル図書室の構想を開始したのは5年前。それから協議を重ねて、最終的に下記のような5つのコンセプトの下、完成まで漕ぎつけました。

- ① 電子リソース中心
- ② 紙の本もハイブリットに
- ③ 本や情報と利用者をつなぐ場
- ④ ICT活用
- ⑤ 居心地の良い空間

「電子リソースと紙媒体の資料の活用をいかに進めていくか」「利用者と情報をつなぐ場として具体的にどのような方策が考えられるか」

「ICT活用とは何か」など、それぞれに苦労はあったのですが、分けても特筆したいのが「居心地の良い空間」の創出です。眼前の大通り公園の四季を感じられる窓際の席や、周りの気配や音を遮断する席では、利用者それぞれのスタイルで落ち着いて読書し、集中して学習することができます。グループ学習などアクティブラーニングは上階のラーニングコモンズで行いますので、図書室内は静かでリラックスできる空間となっています。



「デジタル図書室」と銘打ちましたが、まだまだデジタル化されていない資料も多くあるため、紙媒体の資料も所蔵しています。また、OPACを利用することによって、既存の図書館蔵書約150万冊も、合わせて利用することが可能となっています。

また、新たな取り組みとして、「スマートフォンアプリによる貸出処理」を導入しました。これは図書室ではない場所に排架されている資料について、アプリ上の操作で貸出処理がなされるものです。さらに図書室排架の資料は「自動貸出機」で貸出処理ができますので、大幅な省力化を図ることができました。

「図書館は成長する有機体である」と述べたのは、インドの図書館学者ランガナタンですが、まさに今、関東学院大学図書館は成長しています。デジタル図書室は完成したのではなく、これからもさらに成長していきます。

(関東学院大学図書館 逸見 義頭)